

講 演

## 「西ヨーロッパのポピュリズム」

クン・フォッセン

(訳: 作内由子)

【解説: フォッセン氏の  
オランダ・ポピュリズム研究について】

水 島 治 郎

本講演は、オランダから短期間来日したクン・フォッセン氏が、西ヨーロッパ各国で勢力を伸ばすポピュリズムの現状、特徴、背景などについて、比較を交えつつわかりやすく概説を行ったものである。講演者のフォッセン氏は2013年、オランダ語で300頁を超える『ウィルデルスの周囲に: 自由党の肖像 Rondom Wilders. Portret van de PVV』を刊行しており、オランダのポピュリズムに通じた現代政治史研究者としても知られている(Vossen 2013)。同書はウィルデルス率いるポピュリズム政党・自由党に関する優れた研究書として、オランダで幅広く読まれている。以下では、本講演の背景にあるフォッセン氏の自由党研究について、簡単に紹介しておきたい。

フォッセン氏は『ウィルデルスの周囲に』において、ウィルデルス本人の半生を描いたのちに、自由党の展開と成立、同党のイデオロギー、支持層などについて包括的に論じている。しかしそれだけ興味深いのは、彼が自由党の組織構造について詳細に論じ、自由党の特質を明らかにしている点である。オランダでもポピュリズム政党として政治に参入を試みたグループはこれまで多数あるところ、なぜウィルデルスの自由党のみが、唯一継続的に存在感を保つことができたのか。フォッセンはその重要な鍵の一つを、自由党の組織構造、とりわけ党内統制のあり方に求める。具体的には、公式の党

員をウィルデルス一人に限定し、党の意思決定をウィルデルス本人に全面的に集中させる、徹底した集権構造をとっていること、議員候補者には厳しいスクリーニングをかけ、事前教育を徹底させることで、当選後も活発に活動する議員団を確保していること、自前の党組織ではなく、メディアやインターネットによる発信を積極的に活用し、有権者に直接アピールすることで、効率的かつ統一的な広報を可能としていること、などを実証的に明らかにしたのである。オランダに限らず、新興ポピュリズム政党の多くは内紛や、資質に問題ある議員の不適切な言動・行動で有権者の信頼を失い、自滅することが多いが、ウィルデルスはそのリスクを最小限にとどめることに成功した。この研究に際しては、自由党内部に通じた人々からも数多くの聞き取りを行い、党の実態の解明を試みている。

なお、比較政治学でも、ポピュリズム政党における党内統制の果たす役割については近年注目が集まっており、研究が進んでいる（古賀 2013-14）。フォッセン氏の研究は、オランダの自由党の徹底した意思決定の集権性を具体的に明らかにすることで、同党がヨーロッパのポピュリズム政党の中でも特異な位置を占めていることを示している。『ウィルデルスの周囲に』は、その要約版が2016年に英語で刊行された（Vossen 2016）。拙稿でも要点を紹介している（水島 2016）。同書は、オランダに限らず、現代のポピュリズム政党の行く末を考える上で、重要な位置を占める文献となるであろう。

#### 参考文献

- Vossen, K. (2013), *Rondom Wilders: Portret van de PVV*, Amsterdam Boom.
- Vossen, K. (2016), *The Power of Populism. Geert Wilders and the Party for Freedom in the Netherlands; Extremism and Democracy Series*. London Routledge 2016.
- 古賀光生(2013-14)、「戦略、組織、動員ー右翼ポピュリスト政党の政策転換と党組織」(1)-(6)、『国家学会雑誌』126巻5-6号-127巻3-4号。
- 水島治郎(2016)、「「自由」をめぐる闘争 一オランダにおける保守政治とポピュリズム」水島治郎編『保守の比較政治学 一欧洲・日本の保守政党とポピュリズム』岩波書店、135—159ページ。

近年西ヨーロッパの政治状況は次第に不安定になってきています。ここまで不安定であるのは冷戦後あるいは第二次世界大戦後以来初のことであるという人もいます。ここ数年の間にヨーロッパではいくつかの出来事や進展が起きました。日本でもよく知られているかもしれません。

—ユーロ危機と破綻寸前のギリシャ経済—高い失業率、とりわけ2010年—2015年

—欧州連合に対する不信、イギリスのEU離脱という最悪の帰結

—シリア、イラク、アフリカからの多くの人びとが流入しているということ

—ロシアやトルコと緊張が高まっていること

この不安定の兆候の一つに、エリートおよび／もしくはエスタブリッシュメントに対して大変批判的で、普通の人々の擁護者を装う新しい政党が台頭してきたことが挙げられます。

簡単にさらってみましょう。

フランスではマリーヌ・ルペンの指導のもと、国民戦線が再び勢いをもつようになってきました。国民戦線はもちろん、ジャン・マリ・ルペングが創設した古い政党であるわけですが、マリーヌは党の「脱悪魔化」を試み、ナショナリストイックなフランス人すべてにとっての包括政党たらんとしたのです。彼女はそれにかなり成功して、2017年に予定されている大統領選挙では、第二回投票までいくかもしれません。

ドイツでは、長い間かなり安定的でした。しかしギリシャに端を発するユーロ危機をきっかけとして経済学の教授らによって「ドイツのための選択肢」という新しい政党が設立されました。この党はドイツマルクへの回帰を求めています。移民危機の渦中にあって党はより自国民中心的になり、いまやナショナル・ポピュリズムのドイツ版と考えられています。党は州議会議員選挙で成功を収めています。

イギリスでは、ドイツと多少似たようなことが起きています。当初UKIPは欧州懷疑的な保守知識人のむしろエリート主義的な党だったわけですが、近年ますます自国民中心的なポピュリスト政党になってきて

## 「西ヨーロッパのポピュリズム」

います。〔訳注：小選挙区制という〕選挙制度のために全国レベルでは必ずしも成功しているとは言えませんが、〔訳注：比例代表制をとる〕欧州議会議員選挙では最大政党となりました。党首はナイジェル・ファラージュでした。彼はイギリスのEU離脱をめぐるレファレンダムのあと、先週に党首を辞任しました。このレファレンダムもUKIPの圧力で実施されたものです。党のEU離脱という主たる目的が達成されたので、UKIPがこれからどうなるかはよくわかりません。反移民が党の新しい中心的な争点になるのではないしょうか。

イタリアとスペインでは、より左翼ポピュリスト的な二つの政党が生まれました。ラテンアメリカの例に触発されたスペインのポデモスと、明確な抵抗運動として始まり、左翼ポピュリスト運動へと発展したイタリアの五つ星運動です。この左翼ポピュリズムに加え、イタリアでは北部でいくばくかの成功を収めているナショナル・ポピュリスト政党、北部同盟がすでにここしばらく存在しています。

オーストリア、スイス、デンマーク、スウェーデン、ベルギー、ノルウェーのような小国では右翼のナショナリスト・ポピュリスト政党が成功しており、スイスにおけるように非常に成功し、10—15%以上の場合もあります。

オランダでは、ウィルデルスに率いられた自由党がもっとも議論の俎上に乗ります。選挙で最も得票したのが2009年の17%で、2012年の選挙では10%まで下がりましたが、いま世論調査で自由党は25%くらいを獲得して、これまでの支持率を更新しています。自由党は2002年にできたピム・フォルタイン・リストの後継と見なすことができます。

ヨーロッパで起きていることは、これらの政党全てが10%から25%の票を得ているということです。以下で、ヨーロッパの右翼ポピュリスト政党あるいは自国民中心的なポピュリスト政党に特化してお話をしましょう。なので、ポデモスと五つ星運動はここでは扱いません。

これらの政党のイデオロギーを見ると、いくつかの共通点が分かります。・まず、エリートと、普通の人々とをそれぞれ同質的なものとして扱い、両者を並べてみせることです。そこでは、エリートが間違った、利己主義的なそして腐敗したものとして道徳的に強く拒絶されます。彼ら

は正しくない意図で民主主義を「ハイジャック」してしまった、というのです。このエリート概念は非常に広く、メディア、大学、裁判所、労働組合といったポピュリストが嫌いなあらゆる制度と人間を包摂しています。彼らはみんながお互いぐるになっていて、独立性を当然と思ってはいけない、というわけです。以上のように、専門知識に対する著しい不信があるのです。

・普通の人々の知恵と経験がエリートのそれを優越する、という強い信念。普通の人々は教育こそ受けていないかもしれないが、彼らの声を聴かねばならない！ポピュリストは群衆の知恵を信じています。エリートによって間違った方向に導かれることが時にはあるが、大衆はもっとよく知っている、ということです。

また一つ強い信念として持っているのが、その中で普通の人々が反映し、保護されていると感じる優越的な政治単位としての国民国家です。それゆえ政治家は文化的経済的グローバリゼーションから、また移民から国民国家と自国民を保護すべきであると考えます。この人民に対する賛美は、ファシストの人民概念と違って必ずしも人種主義的でなく、またヒロイズムも持たないわけですが、われわれが「自国民中心主義nativism」と呼ぶところのある種のナショナリズムに至ります。つまり、最初からいた人々がたいていの要求を通すことができて、他の人は適応しなくてはならないという考え方です。

政治は「自分たちの人々」の利益を「第一に」置くことがすべて、ということになります。となると、これは「拡張」ではなく「防衛」ということになります。それはつまり、他の政治家たちは自分たちの人々の利益を第一にしてこなかったので、自分たちの人々とほかならぬ民主主義の概念とを裏切ってきた、という批判を暗に含んでいるのです。

・もともとのファシズムやナショナリズムと異なり、ポピュリストは民主主義に対して強い信念をもっています。中間的な制度をもたない無制限の民主主義を望んでいるという意味で、民主主義的過激主義と呼ぶ人さえいます。人民の意思は憲法上の諸権利と修正条項に対して常に優越するということ。この考え方方がポピュリストを有する種の「非自由主義的

## 「西ヨーロッパのポピュリズム」

民主主義者」たらしめているのです。ポピュリストはまた政党のような中間的な構造を時代遅れであると考えます。彼らはその代わりに、国民投票的な要素と直接民主主義を、エリートの権力を打ちやぶり人民の意思を表明するための重要な道具であるとして好むのです。ポピュリストはまた、しばしば表現と言論の自由を絶対視します。彼らはしばしばエリートが表現の自由を制限しようとしている批判します。ポリティカル・コレクトネスはまさにこの好例と言えるでしょう。

基本的な要素、というべきものがあります。それだけでなく、しばしばいくつかの二次的な特徴も散見されます。私が「風味づけflavor enhancer」と呼んできたものです。これらの特徴は、いくつかのナショナリスト—ポピュリスト政党には見られますが、全てに当てはまるわけではありません。

一イスラム嫌い。私は反イスラム騒ぎanti-islam alarmismという言葉の方がよいと思います。この考えは、イスラムには本質的な誤りが存在する、というものです。政治的イスラムだけでなく、イスラム全体がここでは一体のもので、全体主義的なイデオロギーで、ヨーロッパを征服しようとしている、と思われているのです。それゆえ、イスラムからヨーロッパを守ろうという考え方もまた存在するわけです。この考え方の中では、移民はジハード戦士であり、ヨーロッパを内側から征服しようと企んでいます。ヨーロッパのエリートとイスラムの間には陰謀論さえ唱えられ、それはある種『シオンの賢者の議定書』を思わせます。有名なのはバト・イエオールの本でしょう。

一大衆的で、ときに乱暴なやり方で、反知性主義的であり、皮肉っぽく、人格に焦点を当てる。また専門的な知識や文献などのかわりに大衆文化や誰でも知っているような知識に言及すること。単純で直接的な言葉が、事実を隠ぺいしようとするエリートの真綿でくるんだような言葉に優越すると考えられています。スキヤンダル、論争、メディアの注目が重視されます。

一権威主義。服従すべき自然秩序への強い信仰。社会学的実験も、文化的前衛主義もありません。これが意味するのは法と秩序を支持し、前衛的な形式を批判し、現代的な教育方法を批判し、時には同性愛やフェ

ミニズムも批判する。しかし時にはこれを擁護するケースもあります。

一福祉国家ショーヴィニズム。かなり左翼的な経済政策で、普通の人々の権利が守られるべき、という考えです。とりわけ、高齢者へのケアです。弱い経済政策。福祉国家ショーヴィニズムを唱える党にとって、経済は第一に優先されるものではありません。それゆえこれらの党は経済危機の時にはあまりうまくいきません。

一孤立主義。国際的な危機に立ち向かっていったり、国際協力をしたりすることを避ける傾向。EUへの強い忌避感。

では、これらの党に投票しているのはどのような人々なのでしょうか。色々な人がいるので、一概には答えられません。ほとんどのヨーロッパ諸国でこれらの政党は10%から25%の票を獲得しています。フランス、スイス、オーストリアでは25%から30%、オランダ、ベルギー、イタリアでは15%から20%、ドイツとスウェーデンではだいたい10%です。

これらの党に投票する人々の特徴と、なぜ彼らが投票するのかについてのさまざまな調査がなされています。かつては、若く、教育レベルが低く、非宗教的な男性あるいは周辺に追いやられた気難しい年寄りの男性が典型的な投票者であると思われていました。これらによくあるイメージは、部分的には事実です。そう、低い教育レベルの人々、つまり小学校から高校までの学位しか持っていない人々が多いのです。これがきっと最もっとも明確な特徴でしょう。他方で大卒者は少ないのです。高学歴者と低学歴者との間の溝が広がっていることは、近年ヨーロッパにおいて熱心に議論されるテーマになりました。

しかし、ことジェンダーに関して言えば、構図はそれほど単純ではありません。性差が多少みられる国と、ほとんど見られない国があります。年齢については、共通する明確な特徴はありません。ある年齢層age cohortが多く支持しているとは言えないのです。宗教についても同様です。地理的に言えば、拠点がいくつもあります。古い工業地帯、貧しい地域、大都市周辺のベッドタウン。なぜこれらの党に人々が投票するのかをみると、いくつかの動機が浮かび上がってきます。

まず、移民です。これらの有権者は移民が流入することと移民してきた人々についてimmigration and immigrants否定的な意見を持っていま

## 「西ヨーロッパのポピュリズム」

す。移民がさまざまなレベルで問題を起こすと考えているのです。有権者の目から見ると、これらの政党はなによりも反移民政党であって、移民でない自國の人々のことを考えてくれる唯一の党だと考えるわけです。

第二に、法と秩序です。これらの有権者は犯罪、社会的緊張、腐敗に飽き飽きしています。彼らは法と秩序を回復したいと思っているのです。

第三に、反EU感情です。顔の見えないanonymous官僚的でエリート主義的なEUから離れ、独立した国家たれば、国がよりよくなるという考えです。

第四に、政治的シニシズムと悲観主義です。既成政党は色々なことを約束しますが、彼らは皆お互いぐるになっていて、結局ふつうの人々に耳を傾けることがない、という考え方です。こういった人々は、堕落しているという感覚を強く持っています。悲観的で社会と文化に対して否定的な見方をします。

ここで問題になるのは、むろん、なぜこれだけの人がこういった政党に投票するのか、ということです。なぜ既成政党はこれらの党に信用を奪われてしまったのでしょうか。

既成政党とその政治家に批判的な商業メディアがいつもスキャンダルと腐敗、犯罪といったものばかりを報道し、それによって人々が恒久的危機という印象を受けてしまった、と指摘する理論があります。その結果、「ドラマ民主主義drama democracy」が生じ、その中ではなんでも感情の問題になってしまい、新しい派手な政治家が多くの注目を集めることになります。

この分析には一理あるものの、要点を外しています。新聞は有権者のものの見方を形作るかもしれません、他方で新聞は有権者のものの見方を強化する役割を果たしているのです。新聞というものは営利目的であり、それゆえ読者が読みたいものを書くのです。それゆえ、われわれはメディアでなく、人びとの目線でものを見なくてはなりません。

これを理解するために、3つの相互に強化しあうおおかた同時並行的なプロセスを見なくてはなりません。

まず、人びとのレベルでは、有権者が政党や教会に属さず、ますます個人主義的に、自己決定をするようになり、自己決定のために自ら

に恃むようになったということが看取できます。それゆえ、人びとは自分たちのリーダーのことを聞く必要がなくなり、自分の置かれた状況を受け入れず、より攻撃的です。同時に、これはまたかつての集合的アイデンティティおよび絆の喪失、目的意識・秩序と日常性の消滅、そして献身的な指導者や政党による導きの欠如を意味するのです。例えばオランダでは、旧来からの社民政党とカトリック政党が「柱」としての非常に重要な役割を果たしていました。人々はこれらの柱に属し、その指導者をロールモデルとして受け入れていたのです。この状況は代替するものがないまま消失してしまいました。

政治・経済・文化のレベルでは、我々はグローバリゼーションを目撃しています。経済、情報通信、流動性、テクノロジーで全世界的な変化が起きているのです。ここで最も目を引く要素は、もちろん移民と各国の人口の変化です。オランダでは一世代の間に純粋に白人の社会が多文化・多民族社会に変化しています。独自の文化を持った人々が貧しい近隣に住むようになっていることもしばしばです。同時に、グローバリゼーションによって、経済のありようも変化しました。工場の肉体労働者の職は減り、より安価な代替物があります。その結果、労働市場では多くの失業や不安定な職、そして数多の競争があります。これらの変化全ではもちろん、多くの人を利したが、特に「流動的な多言語話者mobile polyglots」(高度に教育され、国際的に雇用価値があり、複数のアイデンティティを組み合わせることのできる偏見のない個人)に有利に働いた。他方で特定の地域に縛られた「一言語話者monolingual population」(教育程度が低く、内向きで、アイデンティティを結びつけることができない人々)にとっては、不利になったのです。

代表政治のレベルでは、同時に有権者と被選出者との間で、多くの領域において溝が広がっているのが分かります。これはほとんどすべての政治制度や政治の場で、つまり下院から協議会の会議への参加まで、党指導部から利益団体まで、高学歴の人々で埋め尽くされている結果です。多くの人びとはもはや代表されていると感じていません。彼らは特定の党と結びついていると感じていないし、ずっとコスモポリタンで、高学歴で、常に変化の必要を説き、前に進もうとする政治家と自分を一

## 「西ヨーロッパのポピュリズム」

体視できないのです。社会民主主義政党とキリスト教民主主義政党は一つの党の中で人々と歩みを共にしようと試みてきただけにこれらの変化の主たる被害者となりました。彼らはしかしながら高学歴のコスモポリタンという一つの社会学的集団によってあまりにも支配されすぎてきたのです。

それゆえ、ポピュリズムは、深刻な新しい対立——このような対立はときに政治的亀裂(クリーヴィッジ)、すなわちあらゆるレベルで様々な人々の間にある非常に根本的な溝、と呼びならわされています——に光を当ててきました。クリーシはこれをグローバリゼーションの敗者と勝者と呼んでいます。それは低学歴者と高学歴者ということでもあります。これは、「普通の人々」つまり国民と地域により愛着を感じているが、経済変動によって仕事を失いつつある人々と、フレキシブルな高学歴者で新時代の挑戦を見据えている人々との間のクリーヴィッジなのです。

クリーヴィッジ理論には問題がいくつかあります。

まず、グローバリゼーションの勝者と敗者という概念はあまりにも単純です。多くの人びとはグローバリゼーションの成果と問題のいずれも得ています。これまで以上に多くの人びとと競争せねばならないと同時に、遠くに休暇に行ってスシを食べることができます。第二に、これらの政党に投票する人々の中には、かなり成功している人々もいます。例えば、規制を減らし、より柔軟な経済を望む場合がそうです。第三に、移民はどちらに属すのか。彼らは勝者なのか、敗者なのか。大概の国において、彼らはかなり大きな集団です。

結論として、クリーヴィッジを語るのには時期尚早であります。この先12か月の間に、もっといろいろなことが明らかになるであります。アメリカの選挙もありますし、フランス、ドイツ、オランダでも選挙があります。ブレクシットの帰結も明らかになるでしょう。一つ確かなことは、ヨーロッパ政治はこの先一年で多くの懸念を提供するだろうということです。

## 参考文献一覧

—Akkerman, T., S.L. de Lange and M. Rooduijn (eds.), *Radical right-wing populist*

- parties in Western Europe: into the mainstream? (Extremism and democracy)*  
(London 2016)
- Betz, H. G., ‘Against the Green Totalitarianism. Anti-Islamic Nativism in Contemporary Radical Right-Wing Populism in Western Europe’, C. Schori Liang, (ed.), *Europe for the Europeans. The Foreign and Security Policy of the Populist Radical Right* (Aldershot and Burlington 2007)
- Carr, M., ‘You are now entering Eurabia.’, *Race & Class* 48 (2006), 1–23
- Houtman, D., P. Achterberg and A. Derkx, *Farewell to the leftist working-class* (New Brunswick 2007)
- Kriesi, H., E. Grande, M. Dolezal, M. Helbling, D. Höglunger (ed), *Political conflict in Western Europe*. (Cambridge/New York 2012)
- Mudde, C., ‘The Populist Zeitgeist’, *Government and Opposition* 39 (2004), 542–563
- Mudde, C., *Populist radical-right parties in Europe* (Cambridge 2007)
- Taggart, P., *Populism* (Buckingham 2000)
- Vossen, K. *The Power of Populism. Geert Wilders and the Party for Freedom in the Netherlands*; Extremism and Democracy Series. (London Routledge 2016)
- Wilders, G., *Marked for death. Islam's War against the West and Me* (New York 2012)

\* 本稿は、2016年7月にオランダ政治史研究者のケン・フォッセン氏 (Dr. Koen Vossen)が東京大学山上会館で行った講演*Populism in Western Europe*について、同氏の許可を得て訳出したものである。  
本講演および本稿はJSPS科研費(課題番号25285038)の研究成果の一部である。